## history 1

# 荒川の西遷と「元荒川」

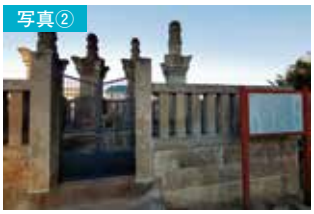
現在の荒川が本来の流路でなく、元荒川が荒川の旧流路であることはよく知られている。元荒川は、熊谷市久下（くげ）のムサシトミヨ保護センター付近で荒川から分かれ、鴻巣市、久喜市、蓮田市、さいたま市等を通って越谷市で中川に合流する。この中川は、「利根川の東遷、荒川の西遷」で流路変更される前の利根川である。つまり、西遷される前の荒川は、利根川の支流であった。

荒川は、その名前が示すとおり、「荒ぶる川」が語源とされ、氾濫を繰り返してきた。戦国時代が終わり、徳川家康が江戸（東京）に幕府を開くと、江戸を水害から守ること等を目的として、利根川と荒川を切り離し、利根川を太平洋に流す、「利根川の東遷、荒川の西遷」が実施された。荒川は、久下から新しい流路が開削され、吹上の大芦橋付近で入間川水系の和田吉野川に繋がれることとなった（写真①）。この荒川の西遷を指揮した伊奈忠次・伊奈忠治親子の墓と宝篋印塔が、勝願寺の境内に建立されている（写真②）。

利根川・荒川流路変遷図

写真①

大芦橋下流にある、荒川と和田吉野川の合流地点。奥の堤防沿いの小河川が和田吉野川、手前が荒川。



写真②

勝願寺境内にある伊奈氏の墓

写真③

河跡湖（明秋湖）

## history 2

# 近代の河川改修「川幅日本一」へ

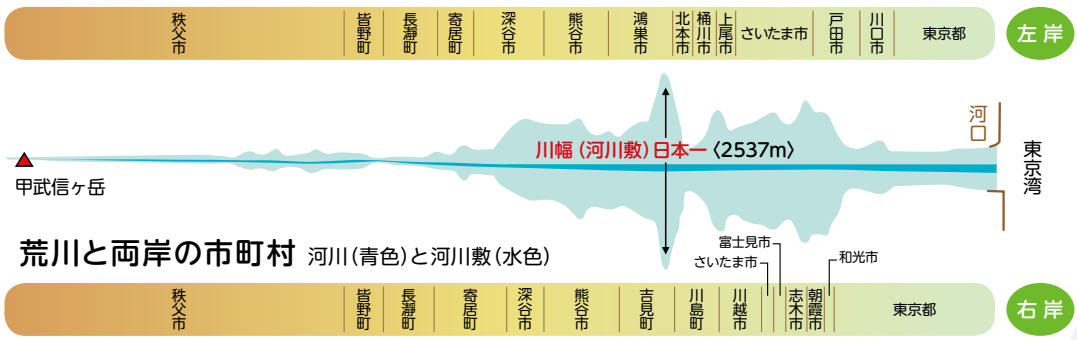
和田吉野川と合流した荒川は、糠田橋付近から北本市高尾付近まで、今の流路より西側を流れていた。その痕跡が、ひょうたん・明秋・釜虎・蓮沼と呼ばれている河跡湖である（写真③）。西遷後も氾濫を繰り返していた荒川は、明治43年の大洪水を契機に荒川改修計画が持ち上がり、鴻巣地区では、それまでの流路の東側、すなわち今の流路を新たに開削することになる。その開削により、後述する横堤と併せて遊水機能を果たす広大な河川敷が作られ、鴻巣地区で最大約2.5㎞の日本一の川幅が生まれることとなった。（写真④⑤）

写真④

写真⑤

荒川河川敷（糠田）
平常時・増水時

川幅日本一の河川敷。写真④は普段の様子、写真⑤は台風で増水した際の様子。




荒川と両岸の市町村　河川（青色）と河川敷（水色）

“川幅日本一”にまつわる

# 歴史的みどころ

鴻巣市・吉見町にまたがる「川幅日本一」の河川敷には、２つの「横堤」が存在する。首都東京を水害から救うことを目的に、1918（大正７）年から建設された堤防である。通常の堤防は、河川の氾濫を防ぐ目的で河川に沿って構築され、水位の上昇による洪水を「河川敷」の範囲にとどめ、氾濫を防ぐものである。ところが「横堤」は、その名のとおり「河川に垂直方向」に構築される堤防で、洪水時において水の勢いを減衰させ、「川幅日本一」の広い河川敷を利用して、河川の水を一時的に大量に蓄え、下流における洪水被害を防ぐ目的で構築された。

しかしながら、河川敷は農耕地であり、何軒もの農家が存在していた。横堤が完成すれば、増水時に河川敷に大量に水を溜めこむことになるため、これらの農家は水没してしまう。そこで、河川敷の農家は、堤防を越えた場所や「構築された横堤の下流側」に居住地を求めて移転していった。現在でも河川敷には、今はなき農家の屋敷森らしき景観を見ることができる。

横堤は、洪水時における交通路の確保も可能にした。洪水時には水没してしまう「冠水橋」ではない「永久橋」を構築するには、2537m の河川敷（川幅日本一）は広過ぎる。ところが横堤があることにより、横堤の端から橋梁を架けることができるために、橋梁の長さは短くてすむ。主要地方道東松山鴻巣線の「御成橋」は 805m、主要地方道鴻巣川島線の「糠田橋」は 776m で架橋できた。洪水時でも、横堤や橋梁は浸水しないことから、荒川を横断しての陸上交通路が確保された。

御成橋先の横堤には、移転によって形成された「鴻巣市御成河岸集落・吉見町古名（こみょう）新田集落」が、糠田橋先の横堤には、やはり移転によって形成された「吉見町明秋集落」が存在する。それぞれの集落にまつわる、徳川家康公に由来する「御成橋」の旧跡、家光公の猪狩りの場であった「須戸野谷（すどのや）（洲渡谷）」に由来する「明秋神社」をここに紹介する。

**横堤に並ぶ古名新田集落**

磯谷有紀・橋詰直道 2011「河川改修に伴う荒川中流域における堤外地集落の移転」より